自由間接話法と情報の伝達構造：話法・引用の対照研究のために

山　口　美知代

1．はじめに[1)]

英語，ドイツ語，フランス語などの自由間接話法が日本語にどのように訳されているのか，また自由間接話法に相当するものが日本語にもあるかどうかといった自由間接話法に関する対照研究は近年かなり進んでいる[2)]。しかしその際には人称代名詞と時制，もしくは再帰代名詞「自分」や視点に関する論考が中心で，情報の伝達構造の相違が議論されることはほとんどなかった。本稿では語用論の分野で研究の進んでいる神尾昭雄氏の「情報のなわ張り理論」のなかで指摘された英語と日本語の情報の伝達構造の違いに注目して，それが英語と日本語の引用表現にどのような違いとして現れているかを論じ，特に英語自由間接話法を日本語に訳すときの問題点について論じる。なお本稿では自由間接話法による発話の伝達を中心に扱う。

2．情報の伝達構造と引用表現

2．1「情報のなわ張り理論」と話法・引用研究

神尾(1998他）が「情報のなわ張り理論」[3)] のなかで指摘する言語事実のなかに，話法・引用構造の日英対照研究にとって非常に示唆深いものがある。話し手が他の人から聞いた話を聞き手に伝える場合に，日本語ではそれが伝聞・引用であることを言語的に明示する必要があり，そうしなければ不自然であるのに対して，英語ではその必要がない場合があるということである。

神尾(1998)で用いられている例を使って説明しよう。たとえばジェーンがジャックと電話で話しをし，電話を切ったあと，側にいたジェーンの母がジャックはなんと言っていたのか彼女に訊ねるとする。このときに英語，日本語で自然な会話はそれぞれ(1)，(2)のようになるだろう。

(1)　Mother: What did Jack say?

Jane: He's coming to visit us soon.

(2) 母親：ジャックは何て言ったの？

ジェーン：（ジャックが）今度遊びに来るって。

（神尾 1998：57-8）

日本語のほうでは「来るって」のような伝聞の形を使ったほうが自然であるが，英語ではHe saidのような表現を使わずに明確な断言を行うことができるのである。「情報のなわ張り理論」ではこれを英語ではジャックから聞いた情報がジェーンの「情報のなわ張り」に入っているが，日本語では入っていないことを言語的に示すものだと説明する。話し手の「情報のなわ張り」に入る条件が英語のほうが緩いこと，日本語では得た情報を話し手の「情報のなわ張り」外のものであるとして伝聞・引用他さまざまな文末表現を用いて伝えなければならない場合が多いことを表す一例である。

「情報のなわ張り理論」は様々な言語や言語現象へと応用され研究が進んでいる（神尾1998：77-108)。話法・引用研究における論考としては鎌田(1988)がある[4]。これは英語を母語とし日本語を外国語として学ぶ学習者が話す中間言語としての日本語を収集，分析したものである。かなり日本語能力の高い学習者でも伝聞表現「・・・そうだ」「・・・って」などを使わないために不自然な話し方になることが多いことが指摘される。そしてその理由を説明するのに神尾の「情報のなわ張り理論」を援用し，英語と日本語の情報の伝達構造の相違に気がつかない学習者が，日本語ならば「・・・そうです」などを使うべきところで使わないからだとする。

神尾(1998他）の「情報のなわ張り理論」では文単位の情報伝達が分析の主対象であるが，鎌田(1988）は誰かから聞いた話を引用して伝えるというような，文より大きい情報伝達の場合についての考察である。英語では他人から聞いた話を引用しながら伝えるときに，誰から聞いた話であるかを明示するために一度は引用節を使う必要がある。しかしその後では伝聞・引用などの表現は不要な場合も多く，必ずしも一文毎にそうした表現を繰り返す必要はない。一方日本語ではその話がなんらかの条件によって話し手のなわ張りに入る特別な場合以外は伝聞や引用を表す形式をより頻繁に使う必要がある，というのである。

2．2 小説の会話分析への応用

鎌田(1988)が中間言語の考察を通して指摘した言語事実は，小説の会話部分の英語原文とその日本語訳を比較対照しても確認できる。

例えば(3)の英語で書かれた小説の一節およびその日本語訳(4)を見てみよう。弁護士と秘書の会話で，新しい依頼人が訪ねて来ていると秘書が告げるのに対して弁護士が答えるところである。

(3) "Tell her I'm not interested."

"But she says she must find a lawyer. Her son has to be in court at one this morning."

"Tell her to see Drew Jack Tyndale, the public defender. He's good and he's free."

Ethel relayed the message. "But, Mr. Brigance, she wants to hire you. Someone told her you're the best criminal lawyer in the county." The amusement was obvious in Ethel's voice.

"Tell her that's true, but I'm not interested."

(Grisham 1992: 34)

(4) 「ぼくは興味がないと伝えてくれ」

「ですがミセス・ウィラードは，なんとしても弁護士を見つけたいご意向です。ご子息が，本日の午後出廷しなくてはならないとのことで」

「だったら，公選弁護人のドルー・ジャック・ティンデイルに会いにいけといってやってくれ。腕はいいし，弁護料は無料だとね」

エセルはその伝言をつたえた。「ミスター・ブリガンス，お客さまはぜひあなたに依頼したいとのお話です。なんでも，この郡ではあなたが最上の刑事弁護士だという話を耳にしたそうですが」

「その女にいってやるんだ。それはたしかに真実だが，ぼくは興味がないってね」

(白石 1993: 71)[5]

下線部は依頼人が言ったことを秘書が弁護士に伝えている部分である。(3)では秘書がBut she says she must find a lawyer. と一度引用節を使って依頼人の発話を伝えたあとは，下線部では引用節を使わずに伝えている。鎌田(1988)が指摘したように，英語では一度引用であることが明示されたのちは，引用であることを一文ごとに明示する必要がないのである。一方(4)では一文ごとに文末に伝聞などの表現を使っている。

この翻訳者の訳文が偶然伝聞表現を使ったというわけではないことは，下線部から伝聞・引用などを表す表現を取り除いてみれば明らかだろう。例えば「ですがミセス・ウィラードは，なんとしても弁護士を見つけたいご意向です。ご子息が，本日の午後出廷しなくてはなりません」のように訳すと，依頼人の発話内容が秘書の「情報のなわ張り」に属していることになり，秘書が必要以上に依頼人に荷担し代弁しているような印象を与え，語用論的に不自然になる。情報の伝達構造の違いにより，英語では必要でないが日本語では伝聞・引用表現などが必要になる例である。

別の小説からの引用をもう一例あげておこう。

(5) "In my dream, I saw a man with a long beard and a mole on his cheek."

"Tyan-yu's grandfather?" asked Huang Taitai. I nodded. . . .

"He said there are three signs. First, he has drawn a black spot on Tyan-yu's back, and this spot will grow and eat away Tyan-yu's flesh just as it ate away our ancestor's face before he died."

. . . .

"And finally, I saw him plant a seed in a servant girl's womb. He said this girl only pretends to come from a bad family. But she is really from imperial blood, and . . ."

I lay my head down on the pillow as if too tired to go on. Huang Taitai pushed my shoulder, "What does he say?"

"He said the servant girl is Tyan-yu's true spiritual wife. And the seed he has planted will grow into Tyan-yu's child."

(Tan 1989 : 64-5)

(6) 「長い顎髭と，頬にほくろがある老人が夢に現れました」

「ティエンユーのおじいさんかい？」私は頷いた・・・・

「彼は三つのしるしが現れると言いました。まず，ティエンユーの背中に黒い染みをつけておくと。その染みはどんどん大きくなって，おじい様が亡くなるときそのほくろのせいで顔が崩れたように，ティエンユーのからだを崩していくだろうと」

・・・・

「それからある侍女のおなかにおじい様が子種を植えるのを見ました。その娘は下層の出身だと偽っているが，本当は貴族の出だとおっしゃり，そして・・・」

私は疲れきって先が続けられないふりをして枕に頭を休めた。フアン・タイタイは私の肩をこづいた。「それから，なんて言ったんだい？」

「その侍女こそティエンユーの妻となるべき女だ，とおっしゃいました。それから，彼が植えた子種がティエンユーの子供となるだろうと」

(小沢 1990: 75-6)

下線部は伝聞・引用であることが英語では明示されていないが，日本語では文末の「と」などで明示されている箇所である。

2．3 自由間接話法との関係

(3)と同じく(5)の下線部では，人称代名詞は話し手中心のものであり，(5)では時制も"He said"に「時制の一致」で合わせるわけではなく，引用している話者の視点から選ばれている。そして

前文に現れた伝聞・引用であることを示す引用節の機能が，文の単位を越えて下線部でも働いている。このような例は，引用であることを文脈によって保証されているという意味で次節で扱う引用節のない自由間接話法と共通の性質を持っているといえるだろう。

もちろん自由間接話法の場合は引用であることを文脈に保証されているだけではない。より本質的なかたちで引用構造は自由間接話法のなかに内在しているのである。自由間接話法では引用する側寄りの人称・時制が一方にあり，引用される側の直接話法であるかのような統語構造や引用される側視点のダイクシスなどがもう一方にある。引用する側とされる側の視点が明確に混在している。そして二つの視点が引用する側・される側の両者の存在を保証し，情報の伝達構造を内在化してもいるのだ[6]。

こうした違いはあるものの，英語自由間接話法を日本語に訳すときの問題点というものは，(3)と(4)，または(5)と(6)の違いと本質的にはつながっているものだと筆者は考える。次節ではこの点を論じる。

3．英語自由間接話法の日本語訳と情報の伝達構造

3．1 自由間接話法の日本語訳と伝聞・引用であることの明示

「英語では引用節がないのにその日本語訳では伝聞・引用表現が用いられる場合がある」というのは，自由間接話法の日本語訳のなかで観察されることでもある。たとえば次のような場合である。

(7) Her enquiries after her sister were not very favourably answered. Miss Bennet had slept ill, and though up, was very feverish and not well enough to leave her room. Elizabeth was glad to be taken to her immediately.[7]

(Austen 1813 : 32-3)

(8) ジェインのことは，いろいろたずねてみたが，返事はあまりよくなかった。昨夜はよく眠れなくて，今朝も起きてはおられるが，まだ部屋は出られない，ということだった。エリザベスは，すぐと部屋へ案内された。

(中野 1963 : 50)

(7)の下線部は主人公が姉の病状を尋ねたことにたいして別の登場人物が答えている発話を引用節のない自由間接話法で描いたものである。この部分を(8)では「昨夜」「今朝」などを補って直接話法的に訳し，「ということだった」という伝聞・引用を表す表現を付け足して訳している。

自由間接話法を日本語訳するときに「という」などの伝聞・引用表現が付加されることは英語だけでなくドイツ語，フランス語の自由間接話法の研究のなかでも従来指摘されてきたことであっ

た。たとえば松井(1959, 1983)は，フランス語の自由間接話法を日本語に訳すときにこうした伝聞・引用表現が付加されることが多いことを指摘し，伝聞・引用表現が付加されるかどうかは「後続部とのつながり」「違和感の有無」「自然かどうか」などで決められるようだと説明している(松井1959:11-12, 1983:10-11)。フランス語に限らず，英語自由間接話法についてもこの説明はあてはまるだろう。

この「つながり」「違和感」「自然さ」を決定するのは文体選択のレベルの判断でもあり，その本質を単一の要素で解明することは容易ではないが，前節で指摘したような英語と日本語の情報の伝達構造の違いも一つの要因だと考えられるだろう。こうした自由間接話法の日本語訳に付加的に用いられる伝聞・引用を表す表現と，情報の伝達構造の違いから使用される伝聞・引用の表現はどのように関連付けて説明できるだろうか。

(7)の下線部は引用節がなく，平叙文の構造を持っているので語り手の地の文との区別が明確でない。だから語り手が登場人物の発話を要約して伝えているような印象を与える。引用節はないがこの部分が発話を伝えているものであることは先行文脈によってわかる。この下線部は(9)(10)のように訳すことも可能である。

(9) ベネット嬢はよく眠っていなかった。今は起きてはいるがまだ部屋から出られなかった。

(10) 昨夜はよく眠れなくて，今朝も起きてはおられるが，まだ部屋は出られない。

(9)は実際にある翻訳者が訳した例である[8]。(10)は(8)から「ということだった」を除いたものである。(9)は語り手寄りの時制を使っているので地の文としての訳出，(10)は登場人物寄りの時制を使っているので直接話法としての訳出というような分類が可能であろう。

ただ，(9)では登場人物の発話の内容はわかるが語り手が語っていることになり，登場人物の発話を語り手が伝えているという伝達経路が明示されない。また(10)は直接話法で伝えられているので登場人物の発話そのものは表されているが，やはりそれが語り手から伝えられているという伝達経路が明示されない。

(9)(10)とも小説の文としては特に不自然でもなく，実際英語の小説の自由間接話法の日本語訳の箇所をみているとこのような訳しかたが多い。しかし発話そのものと伝達経路の両方を訳に反映させることを重視するならば「という」などを補ったほうがいいということになるだろう[9]。

3．2 日本語訳で伝聞・引用であることが明示されやすい状況

引用節のない自由間接話法の日本語訳に引用節などが補われるのは，電話や手紙などの内容が伝えられるときに多い。単に発話を伝えるだけではなくて特別な手段を使って情報がもたらされた場合，情報の伝達経路に言及するのが自然と判断されることが多いからだろう。(11)(12)は電話の

例，(13)(14)は手紙の例である。

(11) In the late afternoon, in the autumn of 1989, I'm at my desk, looking at a blinking cursor on the computer screen before me, and the telephone rings.

On the other end of the wire is a former Iowan named Michael Johnson. He lives in Florida now. A friend from Iowa has sent him one of my books. Michael Johnson has read it; his sister, Carolyn, has read it; and they have a story in which they think I might be interested.

(Waller 1992 : vii-viii)

(12) 一九八九年の秋，ある日の午後遅く，私が机に向かって，コンピューターの画面上で点滅するカーソルを見つめていると，電話が鳴った。

電話の主は，マイケル・ジョンソンという人物だった。かつてはアイオワ州の住人だったがいまはフロリダで暮らしているという。アイオワの友人がわたしの著書を彼に送った。マイケル・ジョンソンはそれを読み，妹のキャロリンもそれを読んだ。で，わたしが興味をもつかもしれない話があるという。

(村松 1993 : 9)

(13) An invitation to dinner was soon afterwards dispatched; and already had Mrs. Bennet planned the courses that were to do credit to her housekeeping, when an answer arrived which deferred it all. Mr. Bingley was obliged to be in town the following day, and consequently unable to accept the honour of their invitation, &c.[10]

(Austen 1813 : 9)

(14) それからまもなく，正餐の招待状が送られ，ベネット夫人が，家政のほまれを高めるべき献立の計画もおわったとき，返事がとどいて，それは延期と言うことになった。ビングリー氏は，次の日ロンドンへゆかなければならず，したがってご招待の栄を心苦しくも云々，というのだった。

(阿部 1963 : 9-10)

(11)および(13)の下線部では電話，手紙の内容が引用節のない自由間接話法で表されている。対応する日本語訳では「という」「というのだった」が補われ，情報の出所が話者以外にあることを明示している。

また小説の地の文ではなくて登場人物同士の直接話法による対話のなかで自由間接話法が使われるときにも日本語に訳すときには引用節などを補うことが多い。小説のなかでも対話というのは語りの部分に比べると日常言語の対人的コミュニケーションに状況がより近いので，前節(3)(4)の場合と同じく「情報のなわ張り」の語用論的制約がより意識されるのであろう。

(15)(16)は小説の登場人物の直接話法による対話のなかからの採例である。

(15) She gave me a bright, slightly artificial smile, but avoided eye contact, 'Oh, hallo,' she said, 'I was just going to wake you.' She had phoned the airport and my plane left at 12.30. She would run me down there as soon as I was ready. Would I like some breakfast, or would I like to take a shower first?

(Lodge 1985: 75)

(16) 彼女は，ぼくのほうに明るく，ややぎこちなく微笑んだが，目を合わせないようにした。『あら』と彼女は言った。『お起こししようとしたところですの。』彼女は空港に電話をかけ，ぼくの飛行機が十二時半に出発することを確かめたのだ。彼女は，ぼくの用意が出来次第，空港まで送ると言った。そして，朝食はどうか，それとも先にシャワーを浴びたいかと訊いた。

（高儀 1986: 93）

(16)の下線部第一文で使われている「のだ」はさまざまな談話機能を持っているが[11]，「情報のなわ張り理論」では「得がたい情報」を表すのに使われると考えられている（神尾1998:110）。「得がたさ」の難度はともかく，ここでは情報の出所が話者（「ぼく」）以外にあることを表していると考えられるだろう。

4．考察：自由間接話法対照研究のために

4．1 自由間接話法の「自由」再考

「自由間接話法」という名称の「自由」の意味の解釈は多様であるが，基本的には主節の引用節からの「自由」を指すと考えられている。たとえばWales(1989)のfree indirect speech／style／discourse の項では，"[free indirect speech／style／discourse] refers to a kind of [indirect speech] (IS) or reported speech in which the speech of a [character] and the words of the narrator are blended, but with no reporting clause indicated (hence 'free')" (191) と説明している。また自由間接話法の「自由」について重層的な意味を与えるToolan (1988)は，主節による従属節化からの統語的自由，語り手による登場人物の「精神的支配（mental domination）」からの自由，直示的表現における自由を表すと説明する(123)。

さて，こうして自由間接話法が引用節から「自由」でありながら引用表現であり得るのは，2.3で論じたように，自由間接話法部分が引用であることを第一義的には内在化された引用構造が示している一方で，同時に先行文脈にある引用節が文を越えて機能していることが多いからでもある。

ところが2.2，3.1，3.2で見たように，英語と日本語では伝聞・引用であることを明示する必要の度合いが違う。だから英語の自由間接話法では引用構造が内在もしくは先行文脈のなかに存在していても，それを日本語に訳すときには伝聞・引用であることを明示しなければならない場合や明示したほうが自然な場合が起こってくる。日本語では英語にくらべ伝聞・引用の内容が伝聞・引用を表す表現（引用節や「って」「と」などの文末表現など）から「自由」になりにくいからである。

なお実際の翻訳に際しては，英語自由間接話法を日本語に訳すときにあたかも元々直接話法が使われているかのように訳す，というのはよく採られる手法のひとつであり，それ自体が問題だというわけではない。本稿で指摘しておきたいのは，例えば(16)のように直接話法に「還元」してしまわないで，人称代名詞を引用する話者寄りで訳出した場合に明確になる，情報の伝達構造上の日本語と英語の差である。そして，「日本語に自由間接話法（描出話法，体験話法）はあるか」といった問いを設定する際には，人称・時制やダイクシスのふるまいを見るだけではなくて，こうした引用構造についても視野に入れる必要があるということである。

4．2 発話描出と意識・思考描出

本稿の議論では最初に断ったように発話の描出のための自由間接話法を中心に扱い，手紙については触れたが，思考，心理，意識，知覚の描出に用いられる自由間接話法については扱わなかった。これは発話描出と思考等の描出は異なるという山口(1993) 以来の筆者の考え方によるもので，Leech and Short (1981)のいう発話描出の標準(norm)は直接話法であり，思考描出の標準は間接話法である，という考え方に基くものである。

「情報のなわ張り理論」では心理を描いたいわゆる「心理文」も分析の対象に入れている。もちろん心理などは推測して得る情報であり，実際に話されたことを聞いて得る情報とは入手のしやすさが格段に違う。「情報のなわ張り理論」では入手しやすさが異なるもののどちらも等しく「情報」ということになるのであろうが，「彼は寂しがっている」のような心理文と「意識の流れ」を描いた小説の心理描写では言語化の程度が違うので，同列に論じることは難しい。思考，心理，意識，知覚等の描出を除外した所以である。

なお，近年の自由間接話法研究のなかで発話描出と思考などの描出を区別して考えることを別の面から支える議論になるものとして，Adamson(1994,1995)がある。Adamson は自由間接話法の本質的な二つの性質として「対話において見られるエコー表現」と「語りにおいて見られる，動詞の過去時制と現在を表す時のダイクシス表現の併用」の二つを挙げる。そして自由間接話法には両者に対応して引用(quotation)と語り(narrative)の二つの異なる起源がある，と論じている。「引用」と「語り」がそれぞれ完全に「発話の描出」と「思考や意識の描出」に対応するわけではないが，「発話描出」の本質が「引用」であり，「思考などの描出」の本質がそうでないことは明らかであろう。

このAdamsonの議論は往々にして一緒に論じられる発話描出と思考などの描出の本質的な違いを考えていく際に有用であろう。例えば，本稿で扱っている情報の伝達という視点は「語り」よりも「引用」の側面に関わることである。ここでは深くは立ち入らないが，自由間接話法の日本語訳で引用節などが補われるのは圧倒的に発話描出のことが多く，思考などの描出ではそのような例はほとんど見かけない。話法・引用構造の比較研究，対照研究を進めるなかでこの区別が持つ意味は大きい。

さらに本節の最後に，Adamson（1994)のエコー表現を自由間接話法表現の本質のひとつとする議論を用いると，本稿で扱わなかった疑問文，感嘆文，命令文などの統語構造を持った自由間接話法に関しても情報伝達の観点からの整理ができることにもここで簡単に触れておきたい。Adamson(1994）はたとえば疑問文構造を持つ自由間接話法であっても，それがエコーと言う形で引用されているために，その発話内的な力(illocutionary force)は失われ，「XがYを疑問に思っている」という平叙文的枠組みへと収まってしまう，と説明する（205)。そうすると，自由間接話法は形の上では疑問文，感嘆文，命令文などであってもそうした機能を持たない平叙文の命題として，「情報」を伝えるものとして扱えることになるだろう。

5．む す び

5．1 方法論

本稿では情報の伝達構造の観点から，英語自由間接話法の日本語訳を中心とする考察を行った。最後に方法論的な問題点と，今後の課題を述べておきたい。

本稿の発想の出発点となった神尾（1998他)「情報のなわ張り理論」は日常言語の対人的コミュニケーションを対象としたものである。書き言葉を対象にした研究への応用として神尾（1990）では，英語とフランス語の間の翻訳に関する研究を「情報のなわ張り」の観点から解釈，紹介して，「翻訳の比較研究を，情報のなわ張り理論の立場から広く試みることは，なわ張り理論に関する応用的研究としても意義あるものであろう」(255)と述べている。またKamio(1997)はこの点に関して方法論の違いを留保しながらもより詳しく紹介している(156-7)。

自由間接話法研究自体，従来の書き言葉中心（とりわけ小説の言語中心）から，近年は話し言葉のなかの用例が検討されることが多くなってきた[12]。日常言語の語用論的分析を中心に発達している情報の伝達構造に関する研究を応用していくことは，この流れの一環として位置づけられるだろう。

5．2 応用の可能性

本稿で試みたように情報の伝達構造の視点から引用節の機能を考えることは，自由間接話法や

話法・引用構造一般の対照研究にとって様々な可能性を持っているだろう。

例えば(7)や(11)の英語自由間接話法の中国語訳を見てみると，やはり(17)(18)のように「据说」や「说是」のような伝聞・引用であることを表す表現が付加されている[13]。

(17)　她问起姐姐的病情如何，可没有得到满意的回答。据说班纳特小姐晚上睡不好，现在虽然已经起床，热度却很高，不能出房门。使伊丽莎白高兴的是，他们马上就把她领到她姐姐那儿去。

（王科一 1996：23）

(18)　一九八九年的一个秋日，下午晚些时候，我正坐在书桌前注视着眼前电脑荧屏上闪烁的光标，电话铃响了。

线路那一头讲话人是一个原籍依阿华州名叫迈可·约翰逊的人。现在他住在佛罗里达，说是依阿华的一个朋友送过他一本我写的书，他看了，他妹妹卡洛琳也看了这本书，他们现在有一个故事，想必我会感兴趣。

（梅嘉 1995： 3）

「中国語における自由間接話法」の可能性を探ったHagenaar（1996）は，中国語では動詞の時制変化がないこと，人称代名詞が使われない場合が多いことなどから，はっきりと自由間接話法とわかる場合が少ない，と論じている。しかし中国語は英語，ドイツ語，フランス語など「自由間接話法」研究の中心になっている言語から日本語と同じくらいかけ離れた構造を持つ。そのような言語で「自由間接話法」に相当する表現を探すには人称，時制，アスペクトの比較の他に，本稿で試みたような情報の伝達構造の比較も行うことも有用であろう[14]。

そして，中国語に限らずこうした例を質的・量的に多く集めて情報の伝達構造から見た話法・引用の対照研究を進めることで，従来の話法の対照研究の中心だった人称・時制・アスペクト・ダイクシスの比較からは見えない話法・引用構造の各言語固有の特徴，および共通の特徴が見えてくるのではないかと考えるものである。

註

1）　本稿作成の過程で文献入手に際して，京都大学の河崎靖氏，名古屋工業大学の鈴木康志氏，名古屋学院大学の原田寿美子氏，滋賀大学の藤田保幸氏にお世話になった。記して謝意を表したい。

2）　詳しくは保坂・鈴木(1993) 参照。それ以後の対照研究には廣瀬(1997) や三瓶(1996)などがある。また筆者自身の対照研究としては山口(1993, 1994) および，Yamaguchi (1995)参照。

3）　「情報のなわ張り理論」を一番詳しく総合的に扱っているのはKamio (1997)であるが，最新の修正などは神尾(1998)にあるので，本稿では後者から引用する。またこのほかに神尾(1990)やKamio (1994, 1995)も参照。

「情報のなわ張り理論」の基本的な考え方は，ある情報が話し手から聞き手に伝えられるときに，その情報は内容によって話し手や聞き手のなわ張りのどちらか（もしくは両方）に属していたり，どちらにも属していなかったりする，そして，話し手はそのなわ張り構造に応じてふさわしい言語形式を用いなければならない語用論的制約がある，というものである。この考え方に基いて，具体的な状況や言語形式の分析から情報のなわ張りを規定する条件が抽出される。

4） 本稿脱稿後井上（1983）の議論を知った。本稿の主題と大きく関わる重要な論考であるので，稿を改めて論じたい。なお，鎌田氏は鎌田(1994)でも敬語などスピーチレベルを決める表現（=「ソーシャルダイクシス」）を選択する際に考慮される要素のひとつとして「情報のなわ張り」に言及している。

5） この日本語訳では“The amusement was obvious in Ethel's voice.”の部分が訳されていないが，単純なミスか故意に省いたのかはわからない。

6） 自由間接話法の伝達構造が内在化されているという議論についてはAdamson（1994）がecho questionとの関連で明確に論じている。

7） Miss Bennetというある登場人物の視点からの呼び方や過去完了(had slept)が指標となっている。山口(1993：23-24)参照。

8） 海老池(1940: 37)。引用に際して原文の旧仮名遣いを改めた。

9） 思考・意識の描出に限定して日本語の「描出話法」を論じた寺倉(1995）は「～という」を用いる「中間話法」と思考・意識を表す「描出話法」を区別する。この考え方に従えば「中間話法」的な日本語訳が，英語自由間接話法の情報の伝達構造を一番忠実に反映しているということになる。

10） 下線部はMr. Bingleyからの手紙の内容を自由間接話法で表したものである。指示の方法(Mr. Bingley)や時を表す表現(the following day)も語り手寄りであるが，be obliged toという語り手の地の文というよりも手紙にふさわしいような語彙や&c.のような表現が，もとの手紙を語り手が要約して伝えていることを示している。 山口(1993：23)参照。

11） 「のだ」の機能については多数の研究があるが，まとまったものとしては田野村(1990)，野田(1997)参照。

12） たとえばFludernik（1993） は話し言葉における自由間接話法の用例を多く集めている。Yamaguchi, Haruhiko(1989）に続く山口治彦氏の研究も対人的コミュニケーションを基本においたものである。

13） *Pride and Prejudice* の中国語訳は複数存在する。自由間接話法による発話描出に「说」などの引用節にあたる表現を付加して訳す傾向が強いのは王科一の訳で，この部分以外でもそうした訳しかたが多い。

14） 欧米の自由間接話法研究の視点を取り入れて中国語について論じたものとしてはHagenaar（1996）以外に特定の作家の文体研究を自由間接話法の視点から行ったHagenaar(1992）や原田（1990），Liu（1995）（特に第四章）など参照。

引用文献

（日本語）

阿部知二　(1963)　『高慢と偏見』 東京：河出書房新社（Austen 1813の訳）

海老池俊治　(1940)　『自尊と偏見』東京：弘文堂（Austen 1813の訳）

原田寿美子　(1990)　「王蒙の話法」『名古屋学院大学外国語学部論集』1　pp.143-159

廣瀬幸生　(1997)　「人を表す言葉と照応」『日英語比較選書 4 -指示と照応と否定』pp.5-35　東京:研究社

保坂宗重・鈴木康志 (1993) 『体験話法（自由間接話法）文献一覧－わが国における体験話法研究－』茨城大学教養部
井上和子 (1983) 「日本語の伝達表現とその談話機能」『言語』12巻11号 pp.113-121 東京：大修館
鎌田修 (1988) 「日本語の伝達表現」『日本語学』7巻9号 pp.59-72 東京：明治書院
――― (1994) 「伝達と模倣と創造：引用におけるソーシャルダイクシスの現われ」『研究論叢』43号 pp.178-185 京都外国語大学
神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論－言語の機能的分析』東京：大修館
――― (1998) 「情報のなわ張り理論：基礎から最近の発展まで」『日英語比較選書2 談話と情報構造』 pp.1-111 東京：研究社
松井三郎 (1959) 「Le Style Indirect Libre－日本語との比較－」『フランス語研究』23 pp.10-14
――― (1983) 「日本語における自由間接話法」『études françaises』19 pp.3-24 大阪外国語大学フランス語教室
三瓶裕文 (1996) 「日本語とドイツ語の体験話法について－間接話法と自由直接話法の間で－」『一橋論叢書』115巻3号 pp.40-60
村松潔 (1993) 『マディソン郡の橋』 東京：文藝春秋（Waller 1992の訳）
中野好夫 (1963) 『自負と偏見』 東京：新潮文庫（Austen 1813の訳）
野田春美 (1997) 『「の（だ）」の機能』東京：くろしお出版
小沢瑞穂 (1990) 『ジョイ・ラック・クラブ』東京：角川書店（Tan 1989の訳）
白石朗 (1993) 『評決のとき』上巻 東京：新潮文庫（Grisham 1992の訳）
高儀進 (1986) 『小さな世界－アカデミック・ロマンス』東京：白水社（Lodge 1985の訳）
田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法Ⅰ－「のだ」の意味と用法』 大阪：和泉書院
寺倉弘子 (1995) 「「描出話法」とは何か」『日本語学』14巻11号 pp.80-90 東京：明治書院
山口美知代 (1993) 「英語自由間接話法の日本語訳：事例研究と今後の研究への問題提起」『京都府立大学学術報告・人文』45号 pp.15-36
――― (1994) 「英語自由間接話法の日本語訳における引用符の研究：Jane Austen の小説と翻訳テキストの比較分析」『京都府立大学学術報告・人文』46号 pp.1-28

（英 語）

Adamson, Sylvia (1994) Subjectivity in narration: empathy and echo. in M. Yaguello ed. *Subjecthood and Subjectivity*. Paris: Ophrys, 193-208.
――― (1995) From empathetic deixis to empathetic narrative: stylisation and (de-) subjectivisation as processes of language change. in Dieter Stein and Susan Wright eds. *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press, 195-224.
Austen, Jane [1813] *Pride and Prejudice*. ed. R. W. Chapman. Oxford: Oxford University Press, 1988.
Fludernik, Monika (1993) *The Fictions of Language and the Languages of Fiction: The Linguistic Representation of Speech and Consciousness*. London & New York: Routledge.
Grisham, John (1992) *A Time to Kill*. New York: Dell Publishing.
Hagenaar, Elly (1992) *Stream of Consciousness and Free Indirect Discourse in Modern Chinese Literature*. Leiden: Center for Non-Western Studies.

———— (1996) Free indirect speech in Chinese. in Theo A. J. M. Janssen & Wim van der Wurff eds. *Reported Speech: Forms and Functions of the Verb*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins, 289-298.

Kamio, Akio (1994) The theory of territory of information:the case of Japanese. *Journal of Pragmatics*, 21:67-100.

———— (1995) Territory of information in English and Japanese and psychological utterances. *Journal of Pragmatics*, 24:235-264.

———— (1997) *Territory of Information*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

Leech, Geoffrey & Michael Short (1981) *Style in Fiction*. London: Longman.

Liu, Lydia H (1995) *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity— China 1900-1937*. Stanford: Stanford University Press.

Lodge, David (1985) *Small World: An Academic Romance*. London: Penguin Books.

Tan, Amy 〔1989〕 *The Joy Luck Club*. London: Minerva, 1994.

Toolan, Michael (1988) *Narrative: A Critical Linguistic Introduction*. London & New York: Routledge.

Wales, Katie (1989) *Dictionary of Stylistics*. London & New York: Longman.

Waller, Robert James 〔1992〕 *The Bridges of Madison County*. London : Mandarin, 1993.

Yamaguchi, Haruhiko (1989) On "Unspeakable Sentences: A pragmatic review" *Journal of Pragmatics*, 13:577-96.

Yamaguchi, Michiyo (1995) A study of the speech and thought representation model proposed by Fludernik (1993): with special reference to Japanese『京都府立大学学術報告・人文』47:33-64.

（中国語）

梅嘉　(1995)『廊桥遗梦』北京：外国文学出版社（Waller 1992の訳）

王科一 (1990)『傲慢与偏见』上海：上海译文出版社（Austen 1813の訳）

(1998年9月11日受理)

（やまぐち みちよ 文学部講師）